

吉井 勇著

東京・京都・大阪

—よき日 古き日—

中央公論社

東京・京都・大阪

よき日古き日

吉井勇著



中央公論社

昭和二十九年十二月五日 三版發行

東京・京都・大阪

定價 一三〇圓

著者 吉井 勇

發行者 栗本和夫

印刷者 山田 一雄

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ノ内ビルディング五九二區
電話和田倉一一二一番
振替口座東京三四番

亂丁・落丁本は本社又はお買求めの
書店でお取替えいたします



伊藤 整 女性に關する十二章

ユーモア・諷刺・皮肉・逆説のみちみちた機略縦横の文章で男性と女性の生き方・物の見方を描破する。男女の幸不幸について心の奥底にふれる智恵の言葉集といつてもよい。

130 圓

山川 均 昔と今——労働運動のあゆみ

「明治・大正・昭和の年代を實際に生きてきた證人」として、日本の労働運動がどんなに激しい彈壓の下に生まれ、變遷し、盛衰し、展開してきたかを多くの挿話とともに語る。

130 圓

テイザード 江上照彦譯 満ち足りた結婚

《結婚の唯一の健全な基礎は性を含んだ愛である》と考える著者が自己の結婚生活と結婚指導會長としての多年の經驗に基き家庭生活の實際面を肉體的心理的見地から述べたもの。

130 圓

堀江忠男 世界經濟史入門上・下

日本の政治や經濟の動きを知り、人間らしい生活を平和に望みうる爲には何をなすべきかを學びとろうとするとき、世界全般の經濟や政治の動きを法則的に掴むことが必要である。

各150 圓

笠 信太郎 新聞の讀み方に關する十二章
他十四氏

刻々に起る國內國外の出來事は、どのような立場と方法で報道されるのかを知り、一々の出來事の意味を正しく讀み取る教養の有無が個人や家庭や社會の幸不幸の分れに影響する。

130 圓

石川欣一可

愛

い

山

エスプリとユーモアと感傷にみちたこの山岳隨筆集は、重苦しい忙しい日日に倦み疲れた心を、一讀たちまち山頂や高原や峠や溪谷のすがすがしい鬱氣の中へつれもどしてくれる。

130 圓

山野尻抱影星

戀 (ほしこひ)

誓子氏ほど星に打ち込んで星の佳句を數多く作つた俳人は古來ない。抱影氏のように四十年も星のことを書き續けて來た人もない。愛星の俳句と戀星の隨筆を組み合せた儉しい本。

130 圓

生島武遼夫

文學と女の生き方

スカーレット・オハラ、カチューシャその他女主人公が生々と活躍する近代小説十二篇によつて、女の一生を通じての生き方を探求する。文學の讀み方の本、人生の手引きの書。

120 圓

龜井勝一郎

二十世紀日本の理想像

「現代の混亂に抵抗するにはいかなる精神能力を必要とするか、いはば抵抗像を形成するための諸考察である。日本の新しいバック・ボーン(背骨)の探求といつてもよい」――著者。

120 圓

中島健藏
他十一氏

二十世紀前半の世界十大小説

過ぎた五十年間の世界中の小説から十篇の代表的作品を選出し、それらの梗概と根本主題の解説によつて二十世紀前半の文學が何を課題とし何を遺産としたかを明かにしたもの。

130 圓

清源 莫

愁 (もしゅう)

當代一の勝負師としての孤獨感と天稟の高雅な心の持主が、南京郊外の莫愁湖への郷愁、日中兩國の習俗、暮のこと、師友のこと、詩歌のこと、草木のことなどを話した語録集。

130 圓

康成 伊 豆 の 旅

牧歌のような海岸線に圍まれ、三十餘の温泉場を持ち「詩の國」「南國の模型」「日本歴史の縮圖」「海山のあらゆる風景の畫廊」などといわれる伊豆を舞臺にした小説と隨筆集。

130 圓

飯島 正 映畫の見方に關する十二章
他十一氏

映畫界の第一線人十二氏が映畫作りの内幕をそれぞれの専門分野で書きおろした。映畫はどのようにして作られるかが分つた上で映畫を見ると感銘の幅と深さと力がちがつて来る。

120 圓

龜井勝一郎 讀書に關する七つの意見

老若男女をとわず、書を讀む上での心の工夫と、それが人生にいかなる意味を持つかについて、現代という時代にむすびつけて、新しく書きおろされた総合的な讀書論。

120 圓

吉井 勇 東京・京都・大阪

— そのよき日古き日 —

歌集「酒ほがひ」「黒髮集」「東京紅燈集」「仇情」、小説「蝦蟇鐵拐」、戯曲「俳諧亭句樂の死」等の作者が若い日の思い出の濃い場所や家や人々のことを物語つた隨筆集。

130 圓

まえがき

「市井」という言葉を字典で引いて見ると、「市街」「坊市」「坊間」「俗流」などとしてあるかと思うと「市井の徒」という解釋のところでは、「樊噲市井徒、蕭何刀筆吏」と、舊唐書の句が引用されている。

私のこの連續隨筆は、ここで言つてゐる市井の徒の誰彼に對する回想記であつて、先ず多くは樊噲の亞流、蕭何のような刀筆の吏とは、あまり關係のないことばかりである。

私の市井好きは少年時代からであつて、中學の三年頃から寄席や芝居通いをはじめ、「十五から酒を飲み出で今日の月」という其角の句ではないが、年少早くも酒肆の繩暖簾を潜り、樽に腰懸けてのんで一升、市井に於ける酒の味を解した。

懺悔々々六根清淨、ここらあたりで長年胸に鬱屈している酒氣を吐いて、すつきりとした心持になつて老後を楽しむのも、亦人生のひと趣向ではないだろうか。

東京

- 新橋界限(五) 兩國橋(八) 名所圖會(一〇) 紅燈點々(一三) 初對面(一五)
土曜劇場(一八) うつけもの(二〇) 「萍殿」の額(二三) 燈籠物語(二五)
解脫(二八) 女寅閣下(三〇) 有美道(三三) 美と女と(三五) 第一やまと(三八)
瓢箪新道(四一) 昇菊昇之助(四三) 伊上凡骨(四六) フリッツ・ルムプ(四八)
龍普回想(五一) 永代橋(五四) 原稿紛失(五六) 辰巳餘情(五九) 押川春
浪(六二) 酒友(六四) 久良岐翁(六七) 半面派(七〇) 鵬の贅(七二) 増田
龍雨(七六) 下町の話(七九) 淺草懷舊(八二) 馬樂地藏(八四) 蝶花樓物
語(八七) 馬樂奇聞(九〇) 市井俳諧(九二) 盲小せん(九五) 月も出ぬか
や(九八) 風俗詩人(一〇一) 蘭蝶(一〇三) 醒睡笑(一〇六) 北里歌(一〇八)
紫烟草舍(一一一) 長田秀雄(一一四) 落漠抄(一一六) 鴻の巢(一一九) 郡虎
彦(一二二) 歌人會(一二四) 酒林雜話(一二七) 春霞(一三〇)

京都

中島棕隱(一三五) 鴨東四時雜詞(一三八) 京の四季(一四一) 手打(一四三)
十二月(一四六) 佐多女聞書(一四八) 藝談(一五一) 嵯峨の雨(一五四) 舞
扇(一五六) 左團次追憶(一五九) 杏花忌(一六一) 磯田多佳女(一六四) 紫陽
花(一六六) 茶碗つくり(一六九) 運命(一七三) 雜魚寢(一七四) 逢狀(一七七)
近松秋江(一七九) 閨怨(一八二) 艷女傳(一八五) 映畫散策(一八七) 島原角
屋(一九〇) 不夜庵物語(一九三) 一目千軒(一九五)

大阪

泥龍和尚(一九九) 美記子歌集抄(二〇二) 八千代回想(二〇五) 曾根崎懷
舊(二〇七) 小林逸翁(二一〇) 六甲對談(二一三) 都踊雜感(二一五) 文樂の
人々(二一八) 笑福亭松鶴(二二二) 桂春團治(二二三) 道頓堀(二二六) 滿身
創痕(二二八) 懺悔錄(二三一)



東京

柳橋界限

近頃私が惠贈を受けた本に、「柳橋界限」というものがある。表紙は唐棧、見返しは墨流し、口繪は井上探景描くところの「兩國橋及淺草橋眞圖」という錦繪、目次を見るに、「昔の兩國界限」後藤末雄、「水郷柳橋」宮川曼魚、「柳橋界限」英十三、「兩國淺草橋眞圖」木村莊八、「柳橋料亭のさまさま」宮崎新三郎、「風流あさがほ染」花柳章太郎、「上平右衛門町の家」伊志井寛、「代地河岸とや」安藤鶴

夫といったような内容で、この顔觸れを見ただけでも、いずれもその道の通人ばかり。ちよつと讀むのが怖くなるような本であるが、まだその上に「柳橋老妓の昔語り」として、藝名は知らず、松田せき、海津とみ、河野とらと、この三老妓の思い出話が加わっているのだから、先ずこれこそ「市井讀本」とも云うべきものであつて、或る意味では天下の奇書と云つてもいいであらう。

いや、まだそればかりではない。この本の插繪は、本文に劣らない位、或いはそれ以上に興味の深いものばかり、「江戸名所圖繪」の馬喰町からはじまつて、石版畫あり、寫眞あり、錦繪あり、見取圖あり、それに點綴するものに、中澤弘光、木下奎太郎、木村莊八のスケッチがあるのだから、單に插繪から云つても、先ず當代の豪華版である。

「互笑會編」となつてゐるから、例のお神樂の御連中かと思つたところ、一字違いでそうではなく、この本の「あとがき」を見ると、

「降る雪や明治は遠くなりけり

この句を昭和廿七年元旦、宮川曼魚氏の放送で伺い、まことにその通りだと思つた。やがては明治を中心に幕末の話も、先ずわかる人は數少くなるのであらう。

吾々の仲間、互笑會といつて時々顔を合せ、ただ何となく寄合つて話をする會、その席上で、何とか今のうちに柳橋や兩國を中心に、覺えていることを書いて置きたいという希望が同人間に出た。それはよからうということで、當時のありのままの情景を記録することになつた」としてあるから、この「互笑會」というものが、大體如何いう會であるかということが分る。

私も今から廿數年前、毎日新聞がまだ東京日日新聞だつた時代だと思ふが、いろいろの筆者が各土地別に分擔して「大東京繁昌記」というものを書いた時、山の手育ちの柄にもなく、「大川端」という一章を受持つて、十五六回續きの印象記風のものを書いたことがある。後にこれは「大東京繁昌記」という本になつて出版されたけれど、今私の手許にないので、何を書いたかすつかり忘れてしまつたが、その時挿繪を描いて呉れたのが、やつぱり木村莊八君で、兩國生れの同君からは、いろいろと教えられるところが多くあつた。當時借覽した資料の中には、丹念に商賣の名前まで一軒一軒書き込んだ圖面などがあつて、記憶のいいのに驚いたことがあつたが、今度もこの「柳橋界限」という本を見ると、それがそのまま挿繪となつて出ていたのは懐かしかつた。

兩國橋

この本の中にある木村莊八君の「兩國淺草橋眞圖」という文章を讀んでいるうちに、私は不圖三十年ほど前によく方々の寄席で聞いた、柳家枝太郎という落語家が得意でうたつた「兩國」という唄の文句を思い出した。これは、

「兩國の夕涼み、軒を並べし茶屋の數、團扇見世には楊弓場、そのほかあまたの諸商人、川の中ではテケテン馬鹿囃子、うろうろ舟に影芝居、屋形屋根舟ある中に」
から囃子入りの急な調子になつて、

「オヤ來なんせ來なんせ、來なんせ黃な粉餅、お望みよくばいくよ餅、淺草市の賣り物は、雜器に塵取り貝杓子、とろろ昆布に伊勢海老が、さわら榎の摺子木こいつあ重い、張子の松茸オオ輕い、今日は歩いて草臥くたびれた、駒形河岸から舟にせう、一番堀から二番堀、三番堀から首尾の松、向ふにかけたるあの橋は、下總武藏の國境、兩國橋とはあれかいな、橋の袂は何ぢやいな」と、これから兩國橋附近の描寫になるのだが、これが中々面白いからもう少し唄の文句を紹介させ

て貰おう。

「その又隣りが鳥娘、親は代々狩人で、親の因果が子に報い、八文ぢや安いもんだ見てゆきな、ヤレ突けじやがたら蛇使ひ、ずらりと並んだ茶屋女、辻占お豆がひとはし一箸ぢや、向ふを通る姐さんは、頬が赤くて福相な、惚れるか惚れぬか聞いて見な、聞いたら惚れぬと申します、或ひは巡禮古手買」

これでこのあたりの描寫が終つて、今度は「茶盡くし」となり「一と茶か茶釜が二た茶釜」と、十つ茶釜までうたい、またこれを逆に繰り返した後、最後は「上つた上つた上つた上つた、玉屋に鍵屋」という川開きの花火を褒める言葉があると、急に落ち付いた調子になつて、

「橋の上では數萬の人の聲、蟲賣り麥湯に西瓜の立ち賣り」

とうたつた後に「豆や枝豆、ゆで玉子、玉子」という賣り聲が入り、

「本家烏丸枇杷葉湯」

という文句で終るのである。

これは江戸時代の兩國橋附近、庶民行樂の繁華な有様から、川開きの花火の晩の賑やかな光景まで、あるがままに描寫した唄であつて、文句も中々巧みであるが、その節回しの變化の多

いところが面白かつた。この枝太郎は今の先代か先々代だと思うが、目の見當の少し違つた、色の青白い長顔の男で、落語はあまり上手ではなかつたけれども、この唄だけは不思議にうまく、高座に現われると必ず「兩國」という聲がかかつた。

江戸時代の兩國のあたりは、こういった唄にも残つてゐるように、かなり殷賑を極めたところで、芝居、輕業、見世物、女淨瑠璃、吹矢、楊弓場、辻講釋、祭文語り、操り人形、八人藝、それに數十軒の水茶屋が並んでいて、そこでは何處でも、若く美しい女を置いて客を引いた。女の風俗は襟手拭、結び立ての髪、折たたみの鏡で化粧をするという艶めかしさだつたが、身持はそれ程自墮落ではなかつたらしい。

名所圖會

こういつた兩國橋附近の光景は、「江戸名所圖會」の挿繪を見ただけでも、およその有様が想像されるが、そこに描かれてある芥子粒ほどの無數の人間を仔細に見ていると、その中からは編笠をかぶつた侍や、空脛を出した槍持奴や、駕籠舁や町女房や馬方や、そのほかさまざまの

人の姿が、はつきりと目に映つて来る。

しかしそれはもう今から百數十年も昔の姿であるが、それよりもまたずつと現代に近い「新撰東京名所圖會」の中にある、明治三十二三年頃の光景を見ても、今から僅か四五十年前のことだけれども、もう現在とはまるで違つた、兩國橋附近の有様が描かれている。それにはこういった挿繪のほかに、次のようなことが記されてある。

「往時は、觀物、みせもの辻講釋、百日芝居と甚雜沓の巷なりしも、近年舊態を一掃して、商家櫛比、殷賑の市街とはなりにき。米澤町には五臟圓本舗大木口哲、横山錦柵が生命の親玉をはじめ賣藥商の看板、四方商舗が和洋酒類罐詰、並びて勸業場兩國館、落語席の立花家、福本、新柳町に新柳亭あり、晝夜義太夫をきかせ（中略）金花館といへる勸業場は、兩國館と相對峙し、隣は大黒屋として新板ものを賣り出す繪草紙屋、さて淺草橋最寄りには、消防署派出所の火見櫓高く、兩國郵便電話支局、いろは第八番の牛豚肉店、栽培せる楊柳樹數十株點綴する間、馬車鐵道は二條の鐵路を敷きて絶え間なく往復し、また九段坂、本所綠町通ひの赤馬車は兩國橋際に停車して、本所行或は萬世橋と叫びて客を招き、大川端の橋の左右の袂には大橋、吾妻橋行の隅田丸發着して、ここ三四町の間、四通八達の街路として極めて賑やかなり」